

社會主義の英國的環境

嶋田啓一郎

- 一、社會革命のロシア的環境
- 二、暴力革命に對するマルクス及びエンゲルスの見解
- 三、英國に於ける社會民主主義の道
- 四、理想主義的・現實主義的傳統
- 五、社會改造運動に於ける實驗的方法
- 六、「社會化」政黨としての英國労働黨
- 七、英國經濟の特殊性と社會主義の漸進性
- 八、三重の挑戰

英國社會主義は、世界に於いて最も早くより、また最も典型的なプロセスを辿つて發展した斯の國の資本主義に戰を挑みはじめてから、既にロバート・オウエンの時代より一世紀以上の歲月を經ている。しかも遙かなる後進國にして、一舉にして社會主義社會の實現へと急進したソヴェート・ロシアの革命を他處目に、それとは對蹠的な漸進的方法を固守しながら、議會主義的社會改造運動の行途に、社會主義社會の誕生を確信して、悠々と獨

社會主義の英國的環境

自の道を進み續けている。英國社會主義のこの漸進的性格は、如何なる事情に基くものであるか。こゝにわれ等は、それをレーニン主義的革命方法と對比せしめながら、社會主義の英國的環境の一斷面を描き出そうとする。

一九一七年のロシア共產主義革命は、皇帝ロシア壓制のもとに、一億五千萬の無智蒙昧なる大衆と、今日の米國勞働者の平均賃銀の十分の一に過ぎぬ社會的困窮とを舞台として、展開された。當時漸く上昇期にあつたロシア資本主義は、歴倒的に優勢なツァーリズムの支配下に、何よりも封建的・軍事的帝國主義として、國民の封建的沒我性を養分として成熟しつゝあつたので、英國社會に於けるが如く、資本主義精神が個人的自覺を培いつゝ對立者を克服したのではなかつた。未だ近代市民社會の個人主義的・自由主義的轉換を齎ること淺く、我の自覺、個人の自由への覺醒の未熟なるまゝに、封建社會より直ちに社會主義社會への飛躍を意圖せざるを得なかつたロシア革命は、不可避的に文盲大衆に代わる少數前衛黨の鐵の統制支配という形で、強制的・中央集權的社會主義政策を強行せざるを得なかつた。ひとしく社會主義とは言いながら、こゝでは大衆の個々人が、生活福祉をより合理的に向上せしめ得る道として、自由なる決斷に於いて自覺的・獨斷的に社會主義を選び、これに参加するといふのではなく、指導者の興え且つ強制する行動目標に向つて、意識の未だ開發されぬ大衆が、先づ威壓的に統率され、その實踐過程に於いて教育され訓練せられて、強制されつゝある自己の行動の意味を次第に自覺するといふプロセスを辿らざるを得ない。封建的社會主義と呼ばれ、強制的社會主義と名付けられるものが、ロシア的環境に於いては、自然であり、又それ以外には道はあり得なかつたのである。従つて、たとえマルクスみづからは、社會主義社會の前途に豫見される將來社會を、國家の權力的統制を超越した自由人の結合體と想定したにもせよ、それに到達するためのボルシェヴィーキの當面の戰術は、常に暴政的と見ゆるまでに壓迫的な強制の貫徹

であり、個人的自由選擇の無視であつた。ポルシェヴィイキが、個人的自由を妨害し、破壊したとなすのは、正確ではない。何故なら社會革命のロシア的環境には、妨害し破壊すべき個人の自由なるものが、最初から缺けていたのである。社會主義社會の建設を、それに参加する人々の自由にして自發的なる決斷に俟たんとしても、合理的思惟に即して常に正しきものの側に自己の意志を決定し得るような、高度に開發され、堅固に鍛えられた個人的自覺なるものは、ロシアには未だ實在しなかつた。社會主義の有効且つ急速な實現を志すポルシェヴィイキが、ロシアに於いて現實に可能とみた道は、皇帝政治から繼承したあらゆる強壓手段、たとえは秘密警察、或いは獨裁制度の強行であつた。

社會主義革命の實踐が、民主主義か暴力かというように問はるべき開發された政治體制のもとに置かれているのではなく、革命的獨裁か反革命的獨裁かという二者擇一を迫られているロシアの特殊事情に鑑み、最初レーニンは、ポルシェヴィイキ戰術を以つて、マルクス主義の國際的に普遍的な正統的原理とは主張せず、ただロシアの客觀狀勢にのみ妥當するものと考えていた。何故なら、マルクスやエンゲルスの革命に關する基礎的見解は、今日世間の一般通念となつてるように、暴力革命と獨裁とを一面的に固執したのではなく、逆に議會主義に基く平和的方法を一層重要なものとして、主張するものであつたからである。

二

革命とは、政治的権力の一階級より他の階級への移行を意味し、クー・デタト (coup d'état) の一揆的行動による強制的権力移讓が、同一階級内部の事件に止まるのとは、本質的に性格を異にする。クー・デターが常に暴力行爲による急激な政權奪取工作を意味するのに對して、革命は必ずしも暴力的社會變革を意味するものではなく、ある場合には階級的勢力關係の徐々の變動に對應して漸進的に進行し、ある場合には暴力行爲をもつて遂行

される激變的權力轉位として現はれる。

社會變革の進行速度は、マルクスにとつて、社會的生產諸力の發展と社會的生產關係の矛盾の深化の度合により左右せられ、従つてその變革過程が合法的・平和的方法、或いは非合法的・暴力的方法のいづれによつて行はるべきかは、一面的原理として規定せらるべき事柄ではなく、階級闘争の客觀的地盤の相違に應じて、時と處とにより異なる判斷を下さるべきものと考えられた。「社會の物質的生產方法は、その發展の一定段階に於いて、これがその内部に於いて活動しつゝあつた現存の生産關係——換言すれば、ただその法律的表現に過ぎざるところの——所有關係と衝突する。この關係は、生産力の發展形態より變じて、これが束縛となる。こゝに於いてか社會革命の時代が現はれる。經濟的根底の變化に伴うて、巨大な上部建築全體が徐々にか急激にか變革する。」(マルクス「經濟學批判」一八五九年)こゝにマルクスは、「徐々にか急激にか」(langsam oder rasch)と言ふ。ひとしく革命というも、「徐々に」或いは「急激に」展開される多様な變革過程が、マルクスの腦裏を往來していたのである。

英國に渡らんとする前年、即ち一八四八年の初めに於けるマルクスは、獨逸社會の現實のなかに、急激革命の勃發に絶好且つ必然的な事態を読み取り、「共產黨宣言」(一八四八年)のなかに「獨逸には市民的革命がまさに勃發せんとしつゝあるが故に、共產主義者はその主たる注意を獨逸に向けている」との認識を表明し、明確に暴力革命の時期到來を主張している。曰く、「共產主義者は、その意見と意圖とを隠蔽するのを恥ぢる。彼等は公然と、彼等の目的はあらゆる從來の社會秩序の暴力的顛覆によつてのみ達せられ得る、と宣言する。たとえ支配階級は共產主義革命に戦慄しようとも、プロレタリアはその鎖のほか失うべき何も有しない。彼等には領有すべき一の世界があるのみである。」^{〔註一〕}「共產黨宣言」

マルクスやエンゲルスは、同様に急激なる革命運動勃發への必然性を、他ならぬ一八五二、三年頃の英國社會に於いて豫見したのである。「豫言は、英國に於けるほど容易なところは他にない。何となれば英國に於いては、凡てが明瞭に尖鋭的に社會のうちに發展しているから。革命は必ず來る。事態の平和的解決を求むるの時期は、既に遅い。」^{〔註三〕}(エンゲルス)マルクスやエンゲルスが、斯く一八五〇年前後の時期に、獨逸や英國に於ける、資本家階級を震撼せしめる暴力革命勃發の必然性を主張したのは、これらいすこの國に於いても、未だ普通選舉制度が實施せられず、斯かる合法的方法によつて勞働階級の政治的勢力擴大を達成する道は存せず、階級闘争に於ける勞働階級の實力行使とは、ひとえに暴力的方法による目的の貫徹を、意味せざるを得なかつたからである。

物質的な經濟的諸條件に於ける變革、それは自然科学的な正確さを以つて確認すべきものとする、マルクスやエンゲルスのいわゆる「科學的」豫見にも拘らず、この時期に於ける獨逸にも英國にも、社會革命の條件は未だ成熟せず、一八四八年より翌年にかけての獨逸革命は失敗に歸し、英國ではチャーチスト運動の敗北の後、暴力革命へと急迫するような何等の事態も惹起せず、却つて普通選舉制度の成立機運に向つてゐる。エンゲルスは、その晩年(一八九五年三月六日附)の『マルクス「フランスに於ける階級闘争」緒言』に於いて、こう述懐している、「歴史は吾々の意見をも誤りとし、當時の吾々の意見が一箇の幻影たることを曝露した。歴史はさらに一步を進め、ただに吾々の當年の誤謬を粉碎したばかりでなく、その下にプロレタリアートが闘争しなければならぬ條件の全部をも、變革した。一八四八年の闘争方法は、今日、あらゆる關係に於いて古くさくなつた。」^{〔註四〕}

一八四九年英國に渡り、そこを終生の居處とさだめたマルクスが、朝夕に凝視した英國社會の現實的進展は、「共產黨宣言」に強調された彼の社會革命戰術に、重大な修正を加えることを餘儀なくした。既に「經濟學批判」

(一八五八年)に於いて、前述の如く「徐々にか急激にか」と記し、社會變革の漸進的方式に位置を與えたマルクスは、その後の英國に於ける普通選舉制實施や勞働組合の法律的地位獲得などの客觀狀勢の變化に即應して、社會變革戰術として從來基本的なるものと考えられてきた暴力革命に對しては、寧ろ批判的立場を表明するに至つた。即ちマルクス及びエンゲルスの署名した「共產黨宣言」新版の序文は、(一八七二年)「共產黨宣言」に對して次の如き重要な戰術變更論を主張している。「最近廿五年間に如何に事情が變化したとしても、この宣言に展開せられた一般原則は、大體に於いて今日もその正當性を完全に保持している。——此處彼處の二、三の點を修正すれば足る。宣言みづからが明らかにしているように、この諸原則の實際的適用は、常に何處に於いても、歴史上存する諸事情に依存する。故に第二篇末尾に提議した革命的^{〔註五〕}方法には、斷じて(durchaus kein)特別の重きを置かない。——この箇所は、今日種々の關係に於いて書き換えらるべきである。過去廿五年間の大工業の著しい進歩と、それと共に前進する勞働階級の政黨組織に對して、また第一には二月革命、さらに進んではプロレタリアートが初めて二箇月間政權を掌握した巴里^{〔註五〕}コミュニンの實際的經驗に對して、今日この綱領は所々、時代遅れ(veraltet)となつてゐる。」

ドイツ社會民主黨が、一八九一年のエルフルト大會に於いて、ゴータ綱領(一八七五年)以來のラッサール主義との混合的形態を一擲して、マルクス主義正統派を自任する政黨へと發展した時に、この社會民主黨の政治的闘争の主力は、もはや暴力革命ではなく議會活動に向けられていた。エンゲルスが、マルクスの「フランスに於ける階級闘争に就きて」新版序文(一八九五年)に主張する合法主義革命論は、時宛かも獨逸帝國議會が社會主義宣傳を困難ならしめんとする所謂「革命法律案」(“Unstutzvorlage”)を審議しつゝあつたことに對する若干の政治的考慮を含むとも考えられるが、當時の社會民主黨が黨員に繰返し強調した暴力革命より議會主義への轉

換戰術の背後に在る正統的マルクス主義の基本的見解を示すものとして、重要な意味をもっている。「普通選挙権は、議會における吾々の代表者に、新聞や集會におけるとは全く違つた權威と自由とを以つて、その上から議會内の敵にも議會外の大衆にも話しかけることのできる演壇を開いた。選挙運動と社會主義的議會演説とが、絶えず、それを撃破しているときに、社會黨鎮壓法が政府とブルジョアジーとにとつて、何の役に立つだらうか。かような普通選挙権の有効な利用によつて、プロレタリアートの全く新しい闘争方法が作用を始め、且つこの方法は、急速に成長發達した。吾々は、ブルジョアジーの支配が組織されているところの國家機構が、それによつて勞働者階級がこの國家機構そのものと闘争することのできるさらに進んだ手掛りを與えることを發見した。……奇襲の時代、意識的な少數者が無意識的な大衆の先頭に立つて指導した革命の時代は過ぎ去つた。大衆みづからがこれに参加し、何が問題であり、何のために行動すべきかを、夙に大衆みづからが理解していなければならぬ。これは最近五十年の歴史が、吾々に教えてくれている。けれども、何を爲すべきかを大衆が理解するためには、長い、辛抱強い仕事が必要である。……ラテン系諸國に於いても、人々は、古い戰術を修正しなければならぬことを、ます／＼悟つてきた。いたるところ、ドイツの例にならつて、選挙権が利用され、達し得るあらゆる地位が占領されてきた。百年以上も前から、革命につぐ革命で掘り返され、陰謀や暴動や、その他すべての革命行動に加わらなかつた黨は一つもないようなフランスにおいて、従つて政府にとつて、軍隊が何ら安全でなく、また一般の事情が、一揆的の襲撃にとつて、ドイツにおけるよりも遙かに有利であるフランスに於いて……かようなフランスに於いてさえも、社會主義者は、あらかじめ民衆の大多數を、即ちこゝでは、農民を獲得しない限りは、とうてい永續的な勝利の不可能であることを、ます／＼悟つてきた。宣傳と議會活動との氣永い仕事は、フランスに於いてさえも、黨のなすべき眞先きの任務として認められてきた。……吾々『革命家』(Die

“Revolutionäre”) 『顛覆者』(die “Umstürzer”) は、非合法的な手段と破壊によつてよりも、合法的手段によつて、遙かによく繁榮するのである。^{〔註六〕}

三

ドイツに於けるマルクス主義の正統的發展者としての社會民主黨は、當時漸く帝國主義的段階にまで成熟し、植民地政策によりそごばくの特別利潤を獲得し、労働階級に何ほどの獅子の分け前を、提供し始めたドイツ資本主義の影響のもとに、國民主義的傾向を帯び、一九一四年の第一次世界大戰勃發に際しては、帝國議會に於けるカイゼルの五十億マルクの戦費支出に協賛するに至つた。しかもドイツの敗戦がカイゼル國家の崩壊を齎したときに於いてさえ、政權を獲得した社會民主黨は、社會主義政策を貫徹し得ず、帝政時代の巨大財閥と官僚機構を温存し、ワイマール體制の興えた政治的自由は、却つて反革命勢力の利用するところとなり、間もなくナチスの抬頭を許容するような政治的弱點を孕んでいた。

ロシア的環境のもとで、ロシアに於ける社會變革戰術の特殊性を自認し、ボルシェヴィキ黨組織論を、ロシアにのみ限定しようとしたレーニンは、ドイツに於けるカウツキーを中心とするマルクス正統派の現實的活動に對する不信から、諸國に於ける議會主義的方法の本質を、ブチ・ブルジョアの日和見主義に過ぎず、金融資本の支配下に帝國主義的對立へと尖鋭化した資本主義諸國の現段階に於いては、實質的鬭争力を持ち得ざるものと批判し、すべからく世界の革命運動は、ボルシェヴィキ黨組織論に統一せらるべきものとの確信に到達した。ロシア革命の渦中に發表せられた「國家と革命」(一九一七年)は、議會主義批判にその銳鋒を集中し、レーニズムの眞髓を直截に表明している。

一九一九年三月モスコウに結成された第三インターナショナルが、第二インターナショナルの社會民主主義的

立場を以つて、資本主義上并期に於ける植民地よりの超過利潤の一小部分により買収せられた上層の少數勞働者が、プロレタリア大衆の利益を犠牲にしてブルジョアに迎合せんとする日和見主義として、これと決定的闘争に入るべきことを宣言し、特に一九二〇年七月の第二回大會に於いて、コミンテルン加盟條件廿一箇條を決議し、第二インターナショナルが、國際組織の一切の決議にも拘らず、各國政黨の自治は尊重せらるべきことを規定したのとは對蹠的に、如何なる國に對しても例外を認めず、レーニズムの革命及び獨裁方式を以つて、唯一の共同戰線戰術と看做すべきことを要求するに至つて以來、社會主義運動は、社會民主主義と共產主義の二方向に、截然と分斷せらるゝこととなつた。

レーニズムの國際的實踐組織としてのコミンテルン、更にその延長としてのコミンフォルムが、斯くの如く諸國の傳統や國民性の相違を越えて、他國の社會主義運動をロシア的鑄型のなかに鍛えあげ、ロシア的環境に避け難く伴う鞏固な中央集權主義を國際的規模にまで擴大せんとし、さらに重大なことには、諸國の社會主義運動のプログラムとその實踐速度とが、各國の社會事情に適應せしめられるというよりも、寧ろソ聯の世界政策のその時々切迫せる利害に左右せられねばならぬという事態は、ロシア的環境とは著しく異なる獨自の社會背景のもとで、獨特の民主主義的訓練に陶冶された文化的市民をもち、特にまた世界政治のうちに廣汎な影響力を及ぼし得る指導的地位を占め來つたような國、即ち英國の社會主義運動にとつては、極めて協調の困難なるものと見えることは、當然である。英國社會主義は、英國の歴史の現實に即して、英國みづからの道を歩まざるを得ない。社會民主主義の道は、英國社會主義の指導者たちが、今俄かに恣意的に選びとつた戰術なのではなく、英國社會の根本的構造が、それ以外の道をもつて社會主義革命の實踐を企てることを許さないのである。コミンテルンの挑戦に當面して以來、英國勞働黨のうちにも、英國社會主義の戰術轉換についての重要論争が提起された。殊

に一九三一年の總選舉に於いて大敗を喫し、從來の二八七の議席より一舉に五二の議席に轉落したとき、後年の勞働黨中央執行委員長ハロルド・ラスキー教授は「危機に立つ民主主義」(一九三四年)を著して、「それまでは勞働黨は、少くとも意識的にはいかなる意味に於いても革命的政黨ではなかつた。しかし一九三一年の經驗は、自發的に『漸進の不可避性』の信念を放棄せしむるに至つた。」と記し、私利利潤の動機を社會構成の原理として、私有權の絶對性を固執する資本主義と、これの否定を主張する社會主義との間には、質的相違を量的相違へ轉換することによつて、對立者の妥協を可能ならしめようとする民主主義的方法を以つては、到底打克ち難き根本的溝渠が介在することを主張した。勞働黨の溫健な理論家と看られているG・D・H・コールでさえ、この時、議會主義戰術をもつては社會主義實現は不可能として、第三の方途を選ぶべきことを主張し、この第三の方途としては、コールも、スタフォード・クリップスも、ひとたび勞働黨が立憲的方法を以つて政權を掌握するならば、反對黨の策動を封ずるため、戦時の國家總動員法にも似た緊急大權法 (Emergency Powers Bill) の如きものを制定して、形式的には立憲的方法に基くが、實質的には獨裁政治を強行して、社會主義政策實現に直進すべしとの見解を抱き、現今の黨首アトリーも、當時はこれに同調の態度を示したほどであつた。しかも勞働黨の立憲精神の基礎を揺がすこの戰術轉換論は、一九三四年の黨大會に於ける殿しい批判を蒙り、やがてラスキー教授たちの自論撤回により結末を告げ、英國勞働黨の議會主義的方法は、却つて不動の信頼性を獲得する結果となつた。

ラスキーは、第二次大戦中に「現代革命論」(Reflexions on the Revolution of our Time, 1943.)を公刊して、ロシア革命と革命後のソ聯政治に對して、そのロシア的環境を分析することによつて、公正なる認識と評價に達しようとして試みているが、彼がボルシェヴィズムに對して批判して止まぬものは、そこに看取される權力濫用

の危険性であつた。人格的自我の自覺に養はれた英國流の社會意識に於いては、議會主義は、民主主義的自由をただに目標とする社會主義社會に於いてのみ實現すれば足るのではなく、社會主義の實現過程に於いても尊重せらるべきであると考えている。このような考え方は、彼が晩年、一新聞記者に語つた社會改造方法論の一齣にも、印象的に表示されている。「英國の民主主義の特徴は？」との間に對して彼は答える、「特徴は決議の仕方にある。第一に暴力ではなく、討論によつて決議が平和的に行われる。第二の特徴は、勝を制した多數派も、常に少數派の意見を少し汲み入れることにある。多數の意見でことは決定するが、反對派にも常に妥協があるというのが、英國民主主義の本質だ。」そのような答え方をするラスキー教授に對して、「危機に立つ民主主義」の著者として、ひとたびは民主主義的方法に根本的疑惑を寄せた當のラスキーたることを知るや知らずや、次の質問は皮肉であり、辛辣でさえある。「この民主主義を通じて、社會主義は果して實現されるか？」この質問に對する彼の答えは、彼の過去を知る者には、微笑ましきものである。曰く「問題は、理論上實現できるか否かということではなく、英國にはこれが唯一可能な道であるということだ。もちろん長時日を要しよう。しかし英國の民主主義に對する確信には、およそ根強いものがある。英國では、これ以外に政治の方法がない。またこれで行はれては、英國の資本家階級も文句がいえないのだ。」と。

四

ラスキー教授が、「英國にはこれが唯一可能な道」と呼ぶ社會民主主義的方法は、英國に於ける社會主義政黨としての労働黨の成立過程から、當然導き出される論理的歸結であつた。英國社會主義の思想的系譜について、英國労働黨の理論家フランシス・ウイリアムスは、その近著『The Triple Challenge—The Future of Socialist Britain』1948 に於いて、こう言つてゐる。「彼等のインスピレーションの多くは、まづ十九世紀資本主義の罪

過にいたく胸を痛め社會主義者へと導かれた成功せる資本家ロバート・オウエンの如き人、チャールズ・キングスレー及びフレデリック・デモスン・モリス牧師の如きキリスト教社會主義者、ウィリアム・モリス、ラスキン、ヘンリー・ジョージの如き機械づくりの醜惡さへの嫌惡者たち、またその見識が勞働組合組織の範圍を超えていたスコットランドの鑛夫ケア・ハーディ、新しきメリー・イングランドの宣傳者ロバート・ブラッチフォードから、またショーヤウエルスの著述からきたものである。^{〔註九〕}

これらの思想的源流を分析するならば、英國社會主義の思想的構成要素は、おのづから明らかとなるであろう。嘗ての勞働黨首ラムゼー・マクドナルドは、その著「The Socialist Movement」1911に於いて、マルクス主義と英國社會主義とを對比して言つたことがある。「社會主義運動は、理想主義に歸りゆくであらう。時として認められざる力ではあつたが、理想主義は常に社會主義のなかに生きてきたのであるから。^{〔註一〇〕}」と。彼がこゝにマルクスの經濟的決定論と對立せしめた理想主義的傾向は、英國に於いては特殊の事情のもとに、社會主義と不可分の結びつけられた。

英國に於けるブルジョア自由主義は、ベンサムの功利主義にその典型を見出し得るように、ホッブス以來の久しき傳統によつて、唯物論的哲學と固く内面的に燼着し、十九世紀に於けるブルジョア自由主義への初期的自己反省者として現れたオウエン、カーライル、ラスキン、ミル、而してトーマス・ヒル・グリーンは、人格主義的理想主義を據點として、唯物論的思惟を武器とするブルジョアジーを抑制すべき立場に置かれた。獨逸の場合の如く、ブルジョア・イデオロギーが、ヘーゲルの觀念論及びランデス・キルヘ（國教會）との結合をもつて、堅固に武装し、更にロシアの如く帝政が教會と一體化するところでは、支配階級への對抗運動は、おのずから戰闘的無神論の如き反宗教運動へと追いやられる宿命をもつていたが、國教とは名のみにして、政教分離の疾くより

行はれていた英國では、プロテスタントイズムは民衆と共にあり、「汝もし基督教徒ならば、社會主義者となるべきである。」^{〔註一〕}(チャールス・キングスレイ・モリス)とさえ唱えている。社會主義運動は、こゝではブルジョアジーとの對立を、戰鬪的無神論の方向に展開すべき必然性をもたず、却つて労働黨の開拓者たち、例えばケ・ア・ハーディ、ラムゼー・マクドナルド、ブルース・グレンシア、クリフォード・アレン、而して現黨首アトリーの如き鏘々たる指導者は、一面には聖書に導かれて、主として倫理的視角から社會主義へと接近したのであつた。ウイリアムス曰く「これら多くの思想運動は、その根底に於いてすこぶる倫理的であつた。彼等は、キリスト教から大いに學ぶところがあつたので、社會主義運動の多くの歴史家たちは、『社會主義運動を育てた諸感化のなかで、その第一の地位は、宗教に與えられなければならぬ』と言つた現首相の意見に、賛成しているほどである。彼みづからは、その宗教的動機の方強さの一つの實例である。」^{〔註二〕}

英國の労働運動を、社會主義運動の方向に導くのに與つて方のあつた三つの團體がある。一はケ・ア・ハーディの率いる理想主義的で、倫理的熱意に満ちた獨立労働黨であり、二はウエップ夫妻やショウの如き知的で實際的なフェビアン協會であり、いま一つはマルクス主義を信條とするハインドマンの社會民主聯盟がそれである。然しマルクスの科學的社會主義は、英國的思惟のなかには成熟の機會をもたず、社會民主聯盟は、英國労働黨が社會主義政黨として發達する以前に、その指導力を失つてゐる。歴史の發展に對する物質的契機とともに、知的及び道德的契機の重要性を強調するマクドナルドは、「唯物論者の歴史概念は、結局、一面的であり、不完全である。」^{〔註三〕}と言ひ、「それ故に唯物論者の歴史概念は、社會主義理論にとつて決して本質的なものではない。……社會主義理論は、事件・時期・組織の漸進的進化を示す歴史概念に基くものであつて、歴史の秩序ある進歩の生ずる理由に就いての一面的解説を據りどころとはしない。」^{〔註四〕}と論じ、却つて英國社會主義の方法のなかに客觀

的な正確さの宿つてゐることを主張しようとする。

嘗つてウェルナー・ゾンバルトは、社會主義の英國的、フランス的、ドイツ的類型を、それら諸國の國民性との關聯に於いていかにも明快に區別したことがある。マルクスの而してゾンバルトみづからの祖國ドイツに就いて、彼は次の如くに告白する。「社會運動のドイツ的特性と、ドイツ的國民性との間には、一の關聯があるかどうか？若しありとすれば、第一にドイツ人の理論的素質 (die doktrinaire Veranlagung) を擧げねばなるまい。即ち彼をして容易に、マルクスの教義體系の複雑な思维過程に立ち入らしめ、教理學者の強靱さをもつて、ひと度受け容れた信條は凡て固執せしめる理論化 (Theoretisieren)、體系付け (Systematisieren)、方式化 (Schematisieren) への傾向である。『原理！原理！(“Das Prinzip! Das Prinzip!”)……ドイツ人の英國人やアメリカ人に特徴的な『實際的』素質の缺如ということ、而して有用な日常政策の問題にのみ没頭することへの嫌惡心が、このドイツ人の理論的嗜好に附隨する。』^{〔註一五〕}と。これに較べて、英國人の國民性は著しく現實的である。「英國人にあつては、彼等の本質の根本特徴は、あらゆる概念を絶した冷靜さであることは、われ等の知るところである。彼等には、魂の興奮と呼び得るものが全く缺けている。……また同様に、彼等には、方式化や理論化の感覺が全く缺けている。そしてそれ故にこそ、彼等は世界を征服し、またそれ故にこそ英國勞働者には、目前の成果から目前の成果へと進み、『到達可能な』目標を定めて、これを執拗な忍耐力をもつて追求するような政策が、適合しているのである。』^{〔註一六〕}(ゾムバルト)

五

英國社會主義が、理想主義的傾向を帯びながら、しかも空想的社會主義の非科學性を脱却して、現實社會の改革に一種の手堅い歩みを示しているのは、ドグマティーカ¹の理論倒れを排して、飽くまで冷靜に實際的效果を

求めようとする實驗精神に因るものである。

（獨立労働黨やフェビアン協會は、深遠な社會哲學を理論的に體系付けることをしなかつた。ただ彼等は、その社會倫理的熱情を、英國の傳統的な實驗精神に従つて、いかに社會的に堅實に實現し得べきかということに關心を集中した。實驗的方法こそは、近代科學の父として英國人の誇りとするフランシス・ベーコンの “Novum

Organum” 1620. 以來の眞理探求のための鐵則であり、マクドナルドが社會主義の實現方法を説くに當つて、

空想的社會主義や革命主義的方法を排して、實驗的方法、議會主義的方法、及び科學的方法を擧げる場合にも、これら三つの方法の一つに結ぶ基本線は、政治を最高度の實驗的プロセスを通して鍛え上げようとする實驗精神にほかならない。一政黨の主張が、その實驗過程に於いて所期の成果をおさめ得ず、その反對黨の批判に曝され、他政黨の主張の方が社會福祉の増大により確實に貢献すると考えられる場合には、民衆の審判するところに従い、政權の移讓が行われる。「あらゆる國家は、實驗により共同社會に益あるものと證明され、民衆の大多數により賛成されたある社會關係及び習慣を、立法並びに行政を通じて社會に實施する資格をもつ。この事業が、

現代の社會主義的方法を決定するのである。」^{〔註一七〕}（マクドナルド）斯くしてデモクラシーや議會的方法は、最大多數

の最大幸福を實現するための社會改造運動に於ける、最も確實にして全國民の納得を期待し得るような實驗的方法に、最大限の機會を保證するために不可欠な政治的手續であり、デモクラシー原則に基く社會的實驗の反復は、遂に社會主義に到達せざるを得ないと確信しているのである。マクドナルド曰く、「社會主義は、デモクラシーの結果である。」^{〔註一八〕}と。

英國的思惟に於いては、實驗こそ常に科學的方法の中心をなすものである。實驗は、ただ一つの前提された原理を現象界に押しつけることではなく、演繹と歸納の繰返しをもつて、現實に肉迫してゆくことであり、このよ

うな手續は、いかなる場合にも現實を場として、反對理論と平等の地位に於いて討論し得る謙虛さを維持しなければならぬ。従つて形式はデモクラシーに據るとしても、實質的には極端な保守主義の要塞たるべく仕組まれたピスマークの強壓政治に對しては、「ドイツ國會は議會ではない」^{〔註一九〕}（マクドナルド）と言はなければならぬ。

社會改造運動に於いて、實驗的方法の確實さをもつて社會構造の根本的變革を圖らうとする努力は、おのづからまた漸進的進行への忍耐性を要求する。急激的變革の意味に於いて用いられる革命について、マクドナルドの批評するところは、英國社會主義の根本的見解をよく代辯していると思われる。曰く「斯くて社會主義的方法として革命を論ずることは、誤りであることがわかるであらう。社會主義者の考えている變革とは、社會の全組織に具現するもの、従つて一の有機的過程であるから、革命は決して社會主義を齎らすことが出来ない。政治の表面的な事柄、例えば共和國たるべきか、王制たるべきかとか、或いは民衆は政治的權力を與えらるべきであるか、政治的奴隸状態に留めらるべきであるかというようなことは、劍に訴えることによつて成し遂げられるであらうが、富の生産及び國內的・國際的交換の諸過程を再調整し、奉仕と報酬との關係を定めるための何等かの正義の組織を確立し、一方の側には過度の富を、他方の側には過度の貧困を生み出すような經濟的組織を克服せんがための變革は、革命が何等かの貢獻を爲し得るような種類の變革ではないのである」^{〔註二〇〕}「革命は目的であつて、目的への手段ではないのである」^{〔註二一〕}。このような見解は、一八九六年のロンドンに於ける國際社會黨大會に於ける「フエビアン政策の報告」第四條の「本協會は革命・軍隊及び警察官との戦闘、及び殉教死よりも、むしろ平和漸進的改良を欲する普通市民に同意するものである。……本協會は有産階級との鬭争に於いて、社會主義の全問題が、唯一回の總選舉、議會に於ける一個の法律案に依つて、悉く決せられるというような瞬間の來たり得べきことを信じない。社會民主主義なるものは、年賦支拂金額のように、漸次に部分的に實現せられるであらう。」

という因循姑息とみゆるまでに漸進的なフェビアン主義と、基調を同じくするものと観るべきである。

理想主義的立場を固執し、また科學的社會主義たるを自負するマルクス主義を排撃しながら、尙且つ英國社會主義が實踐的確信に支えられているのは、まさにこの社會的實驗を中心に展開される科學的方法への不動の信頼である。斯くして「社會主義的方法とは、ダーウィンの方法である」^{〔註三三〕}（マクドナルド）と言つてゐるように、英國社會主義の辿らんとする道は、彼等の「科學的方法」なる概念の本質的要求に基いて、進化論的過程であり、

いわゆる革命主義に攪亂されまいとする努力は、一九二四年の勞働黨年次大會に於いて、共產主義者への抗議という形をとつて表れた。その「報告書」に曰く「共產主義者の目標は、勞働黨の戰術を革命主義化し、勞働黨を共產主義的組織に造り變えようとするにある。……故に、共產主義者は勞働黨より排除せらるべきである」^{〔註三四〕}

英國的社會構造、英國的思惟類型を背景として、この國の社會運動の方向を考察するならば、嘗つてカール・デールが、「およそマルクス理論ほどに非英國的なるものはなく、それが英國的地盤に決して根をおろすことなきは、疑いを容れぬところである」^{〔註三五〕}と斷言したことが、今日も尙、眞實性を保つてゐる理由を理解することができるであらう。

社會構造が封建社會的要素を殘存せしめ、身分秩序が武力的權力により強固に維持せられ、社會的利害の對立がある程度の平等的發言權を基礎とする納得的方法による相互交渉の道をもたず、一面的な自己主張が遂に力關係に於いてのみ問題の解決點を見出し得るような、社會的異質性の非合理的活動の壓倒的に優勢な環境に於いては、社會發展過程が辨證法的思惟方法に於いて把握せられるのは、自然のいきおいと言ふべきか。それに對して、英國社會の如く、數世紀に亘る資本主義への發展が、武斷的封建社會の根底を徐々に切り崩しつゝ、それがいかに外見のものであれ、一應デモクラシー社會への轉換を成し遂げ、近代性の特質たる合理主義を共通地盤

として、對立者間の相互交渉の道を切り拓き得た社會にあつては、社會的異質性は直ちになまのまゝの力の闘争に於けるあれかこれか *Entweder-oder* の解決を求める方向をとらず、合理性を媒介として、何ほどのかの同質性の認識に於いて、對立を調和、あるいは少くとも緩和しようとする。そのような社會では、社會發展が進化論的漸進過程に於いて把握せられることも、決して不思議ではない。他の種々なる上層建築の要素が、歴史的階級闘争の過程に影響を及ぼし、多くの場合、その形態を決定する——という命題は、英國社會主義の漸進的性格を理解せんとするに當つて、切實な意味をもつていふように思はれる。

六

斯かる漸進的、或いは進化論的過程を経過することによつて、果して社會主義は英國に實現され得るのであるか。そもそも英國労働黨そのものは、明確な社會主義理論を指導原理として、社會主義的改造の本格的コースを歩みつゝあると言ひ得るのであるか。

獨逸に於ける社會民主主義理論家としてのカール・ディールの眼に映じた英國労働黨の印象が、彼の初期の著書 (*Über Sozialismus, Kommunismus und Anarchismus, Erste Auflage, 1905*) に於いても、近年の著書 (*Der Einzelne und die Gemeinschaft, 1910*) に於いても、殆んど變ることなく消極的なものであることは、停滞性とさえみられるほどに漸進的な英國社會主義の歩みを示すものとして、注目させられる。「労働黨は、故意に一定の綱領を定めなかつた。何よりもまづ、労働黨は決して一の社會主義政黨たるを欲していない。それ故に社會主義の全綱領についても、何等觸れていない。……従つて労働黨は『社會化的』(“*Sozialisierende*”) 政黨たるべきものであつて、『社會主義的』(“*Sozialistische*”) 政黨たるべきではない。その課題は、社會主義を準備すること、即ち社會改良工作を強力に推進し、國民的生産收益に於ける労働者の分け前を増加せしめ、漸次に政治

的及び産業的民主制を實行し、現存の經濟組織を除々に、一步一步、全體の所有及び統制のもとに移行せしめることによつて、社會を次第に社會主義に近附けてゆくことにある。」^{〔註三五〕}

カール・デールがこゝに英國労働黨を、社會主義的政黨ではなく、社會化的政黨と呼び、他のところでは、「従つて一種の社會的自由主義 (Socialliberalism) と呼んだ方が一層正しく、この社會的自由主義は、労働組合の場合にも、また大部分の自由主義者の場合にも見出される。」^{〔註三六〕}と評していることは、ある意味で英國社會主義の現段階を適確に性格付けていると言ひ得るであらう。マルクス主義者ハインドマンが、既に一九〇九年の論文 “Socialism and Labourism in England” に於いて、英國労働黨は、今日のわが國社會主義の進展の最大の障害となつてゐると歎息し、大陸に於けるベルンシュタインの修正主義に類似の進路をとる英國労働黨を痛罵したにも拘らず、英國労働黨が四十年後の今日も尙、依然として悠々と既定のコースを前進しつゝあるのは、社會改造運動に於ける前述の如きリアリズム精神と民主主義的傳統の抜き難き感化によるものであるが、この比較的固定化した變革戰術を支えるものは、労働黨支持者の社會的構成、従つてまた労働黨のイデオロギー形成の社會的地盤としての英國經濟の特殊構造に求められなければならない。

人も知る如く、英國労働黨はその黨組織方法に於いて、労働組合の團體加入を主軸とする。ウィリアムスによれば、一九四八年の黨員總數四、六八五、〇〇〇名、そのうち團體加入による労働組合員が四、〇三一、〇〇〇名、即ち全黨員數の八六%を占め、労働黨の思想的腦髓ともいふべき役割を果してきたフエビアン協會の如き社會主義團體の加入は僅かに四五、〇〇〇名、それに個人的加入者六〇八、〇〇〇名が加はる。

然らばこれら労働組合員の政治意識は、如何なる方向に向けられているのか。N・バルウの近著 *British Trade Unions, 1947* に依れば、労働黨と密接な關係にあるトレード・ユニオン・コンGRESに加入せる労働組合は一

九四三年度に於いて一九〇組合、その組合員總數六、六四二、三一七名を算えるが、そのうち代表的なるもの四〇組合（その組合員總數五、九四五、六九七名）について、その政治的態度を調査したところ、"radical changes" を望むもの九組合四、〇四六、九三〇名、協同組合主義的意圖より労働黨支持を表明するもの四組合二六六、五八七名、サンヂカリズム的立場八組合五七五、八一六名、改良主義的立場一〇組合六〇六、八八二名、労働組合法にいう政治的目的に限定するもの六組合二八三、三二六名、特定政治目的を持たぬもの三組合一六六、二五六名を示し、社會主義的變革を欲する労働者の數は、一應、大多數を占めると見られる。^{〔註二七〕}然し労働組合選出の議員數は、労働黨議員總數中に一九一八年の總選舉に於いて八六%であつたものが、一九三五年には五三%、一九四五年には二九%を占めるに過ぎぬ。即ち労働黨が國民總投票數二千三百萬の過半數を制して、政權を掌握するためには、より廣汎な勤勞大衆並びに小市民インテリゲンチヤ階級層の支持を必要とするところから、總選舉の重なるにつれて、労働黨議員團の構成分子中に占める労働組合選出議員數の比重は、相對的に減退せざるを得ず、カール・デールが、英國労働黨に就いて、「社會主義者の合言葉は、もはや『階級意識』ではなく、『共同意識』 (Gemeinschaftsbewusstsein) となければならぬ。社會主義は鬭争を齎すべきではなく、『相互扶助法則』を發展せしむべきものである。」^{〔註二八〕}と批評したことが、今や一層適切な意味をもつに至つたのである。斯くて英國労働黨は、單に労働者階級のみを代表する純然たる階級政黨ではなく、辯護士・醫師・教師等の自由職業者をはじめ、實業家及び貴族中の進歩的分子をも廣く包含するいわゆる「國民政黨」的性格を濃厚ならしめている。ウイリアムスが労働黨の代表する利害を、ただに労働者階級のそれとして規定せず、より包括的な「コミュニケーション」の利害として語らうとするのも、實はこのような事情に基いてるのである。

たとえ英國勞働組合の主流が、既述の如く「radical change」をいかに熱望するとしても、それが諸國のマルクス主義政黨の意味する急進性とは、著しい懸隔を保たざるを得ないのは、國際經濟に依存してのみ生存し得る英國の特殊的地位に即應しながら、ひたすら現實に適合する方法で資本の蓄積と勞働の生産性とを維持するのになければ、完全雇備も高い生活水準も實現し得ない極めて微妙な立場に置かれているからである。殊に大戰の痛い打撃から立ち直ろうとする英國に於いては、何人が政權を擔當しようとも、輸出能力の挽回のための生産力の再建を當面の緊急課題とせざるを得ず、嚴密にして漸進的な社會的實驗の過程を無視する社會主義的變革の公式論の強行が、一步誤れば生産能率の低下に導き、忽ち英國經濟の息の根を止めるものとなることを、勞働者階級といえども自覺せざるを得ないのである。

英國は、その四千八百万の國民の生存を維持するためには、食糧の約四分の三、即ち肉の五五%、小麥の七五%、バターの八五%、一切の茶、コ、ア、また砂糖の四分の三というように、年々二十万トン以上の食糧を海外より輸入しなければならず、木綿及びゴム、石油の全量、羊毛の六分の五、鐵鑛石の三分の二、木材の大半など、石炭を除く大部分の工業原料品を輸入に俟たざるを得ぬ一大輸入國であり、戰前の輸出貿易額年算約五億二千万ポンド、輸入超過額年算約四億ポンド、(一九四七年には輸出額年算約十二億ポンド、輸入超過額年算約六億ポンド)で、この超過分は外國よりの利子・保険料・船舶運賃等の貿易外受取を以つて決済されてきたが、今次の大戦はこの收入財源としての海外資産・證券等の賣却を餘儀なくせしめ、支拂超過勘定の決済のために、十億ポンドの巨額の金の對米流出を不可避ならしめた。ジョン・スコットに従つて「散文的アナロジーを用いるとすれば、英帝國はズボンを盗まれることを防ぐのに必要な鐵砲を買うために、そのシャツと靴とを賣つた」^{〔註二九〕}のである。

價格昂騰にも拘らず、英國輸出額は一九四三年には一九三八年の半額に減退し、國民所得に對して輸出額の占める割合は三八年の一〇・二％より四三年には二・八％に轉落している。全家屋の五分の一を壊滅せしめた爆彈の被害と機械の老朽化によつて齎らされた窮乏と生産力の消耗のなかにあつて、輸入超過の貿易勘定の辻褄を合せらるるためには、政權擔當者は、それが何人であれ、生産能力を戰前水準以上に向上せしめ、「飢餓輸出」といふ非難をさへ蒙るほどの高度の強制輸出と國民耐乏による輸入抑制の道を選ばざるを得ない。英國の經濟雜誌「The Economist」が指摘したように、それは一面には英國の資本家階級にある程度の社會主義的處置の必要を悟らしめると同時に、他面には勞働者階級に對して、産業の國有化が明らかに生産増大の保證となり得るまで、全面的社會主義化を手控え、私的企業の基礎の上に、計劃化と統制によつて最大限の能率を實現すべく、社會の過渡期的再編成を行う忍耐心の必要なることを認識せしめるものとなつた。

ジョン・スコットは言ひ、「英國のある人々が考へ始めている意味での社會主義というのは、大陸マルクス主義者のいう社會主義とは可成り違つてゐる。それは恐らく、社會主義と呼ぶべきものではないであらう。恐らくは、『Planned capitalism』或いは『collective capitalism』といつた方がよいであらう。」と、このことは適評であろう。それは勞働黨の指導者みずから自覺してゐることであつて、「なかば社會主義、なかば資本主義の混合經濟」(ドールトン)と定義するよりも、「最少の社會主義的要素が注入された資本主義國家」(ラスキー)と告白することの方が、英國經濟の現段階を一層良く表明してゐるであらう。

勞働黨政策を社會主義的方向へ急進化せしめようとする主張は、黨大會に於けるR・オウブンショー、G・コーンズ、J・B・フィギンズ等の討論のなかにも現れてゐる。たとへ利潤の六〇％が租税として徴收されてゐるにしても、國民所得のうち利潤として分配された部分が一九三八年で五六・八％、勞働黨政府のもつて四七年に

五八・七％、四八年でも尙三六％の高率を占めていることは、注目すべきことであつて、利潤の絶滅を期する社會主義の政黨としての勞働黨が、今も尙斯くも高率利潤を許容しているのは、在野時代の社會主義理論と思ひ合せて、いかにも矛盾多きものと見えるであらう。然し生産力増大を存亡の危機に立つ英國經濟の緊急課題と認める勞働黨は、輕率な全面的社會主義化によつて能率低下の冒險をおかすよりも、統制下の私的企業の活用によつて、現實の生産復興を確保することの手堅さを選ばざるを得ぬ。こゝにも亦、ウェップ夫妻が英國勞働組合の政策について言つた「前後撞着の御都合主義」^(註三二) (“inconsequent opportunism”) が、老衰者の亂れ足ではなく、客觀的事態に即應して、最も確實にして有效な結果を収めようとする現實主義者の健康な足取りをもつて、計畫的に選びとられてゆくのである。

勞働黨が、初めて明確な社會主義的國有政策を樹立したのは、一九三一年の經濟危機の時期、即ち過剩生産と需要缺乏が資本主義經濟の主要缺陷として現れた頃のことであつた。ここでは生産問題は一應解決せられたものとして、より公平な分配政策、即ち質銀と勞働條件の直接的向上が、國有化の第一の目標とされていた。然し絶對的生産量の減退した戦後の英國に於いては、事情は著しく異り、社會主義の當面の任務は、「現存のケーキを一層公平に分配するというのではなく、そのケーキの大きさを増すことにある」^(註三三) (ウイリアムス) のである。

勞働黨の分配政策の一環として、多年の辛苦の末に實現し得た社會保障制度といえども、生産の低調、従つて磅の危機と共に壓縮の運命を辿らざるを得ず、従つて英國の國有化政策は、生産力増進への確實な保證なくしては、國民の支持を得ることが出来ない。例えば、國民環視のもとに一九四七年一月より實施せられた炭坑國有にしても、四八年四月までに從來の炭産量低下の主因をなした坑夫缺勤率を一九・九四％より一〇・八％に引下げ、週産三七〇万トン^(註三四)を四二四万トンに引上げはしたが、所定の生産量を達成するに至らず、ウイリアムスの告

白しているように、未だ公共的所有の全領域に於いて、國有化が勞働者の態度を根本的に變化せしめ、國營事業への決定的確信を抱かせるまでには至つていないといふ實狀は、おのづから國有化推進を慎重ならしめ、英國社會主義のテンポを一段と漸進的なものへと制限しているのである。

八

英國の置かれた客觀狀勢に於いて、社會主義の戦ふべき相手の第一のものは、國民の經濟的基礎が根本的に變化しているにも拘らず、資本主義の母國としての古き經濟的社會的觀念に依然として斷ち難い郷愁を感じている國民の惰性的精神であり、炭坑・電氣・鐵鋼國有化への努力は、世界のどの國よりも國家の機能を *「indivisible minimum」* に限定することに慣れてきた英國的傳統のもとでは、一の革命的エネルギーを必要とすることを理解しなければならぬ。

その第二の相手は、國際競争に於ける地位が著しく變質しているにも拘らず、七つの海を支配した大英帝國の過去の榮耀榮華への醒めやらぬ夢を追うている國民の帝國主義精神である。勞働黨内閣の現實主義は、保守主義者の回顧的執着に挑戦して、英國の政治的、經濟的實力にとつて重荷となりつゝある植民地政策の切捨て、例えばパレスチナ委任統治權の放棄、ビルマやインドの獨立承認を敢行して、財政的負擔を軽減し、虚しき誇りに對して支拂うべき高い代價が、國民生活水準の低下に導き、社會保障制度の危機を齎らすことを極力回避しようとなつて努力している。

しかも英國社會主義の、第三の、而して最も手ごわい相手は、國際資本主義競争の坩堝のなかに貿易上の地歩を維持するために打破しなければならぬ國際經濟上の障害である。英國の將來が、海外貿易の盛衰に死命を制せられる事情にあることは、社會主義英國にとつても以前と聊かも變りはない。社會主義への前進が、特に英國に

あつては、國際資本との寸時も手をゆるめることを許さぬ激しい競争のなかでのみ可能であるという困難な對外的地位が、主觀的には社會主義政策への前進を意圖する勞働黨をして、客觀的には資本主義競争のための英國資本の合理化過程の擔當者としての外貌を呈せしめるという複雑な事態に導いているのである。而してこのことを、英國社會主義をして、ロシアの如き外部から隔絶した別天地に、破天荒の變革を行う急進革命を不可能ならしめ、飽くまで漸進的改造の道を選ばしめる經濟的環境なのである。

若き日のラスキーが、コンミニニズムを批評して言つたことがある——「疑いもなく、一般的意味で、コンミニニズムの誤謬は、この世界は複雑なものであるという事實に直面することを拒む點にある。その万能藥は、唯それが普遍的な效き目をもつにはこの世界はあまりに複雑であるという理由だけで、非實際的なものである。われ等の問題に與えられる如何なる解決も、たとえ最善・至高のものであつても、やはり部分的且つ不完全たるを免れない。つまり社會的對策のただ一つの方法を以つて、我々の遭遇する種々雑多の必要に應じ得るようなものはないのである。」^{〔註三五〕}こゝにいうこの世界の複雑さは、同時にまた現在の英國が當面する社會的、經濟的且つ國際的環境の複雑さでもある。その複雑な環境に悩み抜いてきた英國人にとつては、コンミニニズムがただ一つの万能藥として押付けてくる社會變革方式を、無雜作に呑みくだすことは出来ない。英國社會主義は、英國の思想的傳統と經濟的基盤の特殊性に基いて、自己の獨特の道を歩まざるを得ない。そこに英國社會主義のユニークな性格が生れるのである。

社會運動に於ける英國型とフランス型とを比較するとき、「何という場面の變化であることか！生眞面目な、冷靜な、重苦しい人々のいる霧深く、煙のたちこめた、陰鬱な英國から、活々とした、情味豊かな、氣輕な國民をもつ明るく、陽の輝く、濶いフランスへ！」^{〔註三六〕}（ゾンバルト）という感懐の湧きくるその英國——しかもその陰鬱

さのなかに、忍耐強く進歩の方向を戦ひ取らうと努力する英國社會主義は、革命と反革命の目まぐるしく連続するフランスでは未だ着手し得ぬ革新政策を、一步一步實現してゐるのである。

- [註一] Karl Marx; Zur Kritik der politischen Ökonomie, herausgegeben von K. Kautsky, 1924, S.L.V.
- [註二] Das kommunistische Manifest, Verlagsgenossenschaft "Freiheit," S. 48.
- [註三] エンゲルス「英國に於ける勞働者階級の狀態」(一八四五年)、『マルクス・エンゲルス全集』第三卷三〇八頁。
- [註四] エンゲルス『マルクス「フランスに於ける階級闘争」緒言』(一八四五年)、『マルクス・エンゲルス全集』第五卷一三頁。
- [註五] Das Kommunistische Manifest, Vorreden, London, 24. Juni 1872, S. 10-11.
- [註六] エンゲルス『マルクス「フランスに於ける階級闘争」緒言』(一八四五年)、『全集』第五卷一二一-二四頁。
- [註七] Harola Jaski; Democracy in Crisis, 1933, p. 39.
- [註八] 朝日新聞「昭和十二年三月十五日號」『トスキー教授講話』
- [註九] Francis Williams; The Triple Challenge—the Future of Socialist Britain, 1948, p. 31-2.
- [註一〇] J. Ramsay MacDonald; The Socialist Movement, 8th ed., 1928, p. 211.
- [註一一] Charles Gide et Rist; Histoire des doctrines économiques, p. 597.
- [註一二] F. Williams; Op. cit., p. 23.
- [註一三] J. R. MacDonald; Op. cit., p. 144.
- [註一四] J. R. MacDonald; Op. cit., p. 146.
- [註一五] Werner Sombart; Sozialismus und Sozial Bewegung, Neunte Auflage, 1920, S. 230-240.
- [註一六] W. Sombart; Op. cit., S. 217-8.
- [註一七] J. R. MacDonald; Op. cit., p. 105.

- 〔註12〕 J. R. MacDonald; Op. cit., p. 108.
- 〔註13〕 J. R. MacDonald; Op. cit., p. 108.
- 〔註14〕 J. R. MacDonald; Op. cit., p. 103-4.
- 〔註15〕 J. R. MacDonald; Op. cit., p. 105.
- 〔註16〕 J. R. MacDonald; Op. cit., p. 115.
- 〔註17〕 Eugen Varša; Die sozialdemokratischen Parteien, 1926, S. 119.
- 〔註18〕 Karl Diehl; Über Sozialismus, Kommunismus und Anarchismus, Fünfte Auflage, S. 292.
- 〔註19〕 Karl Diehl; Op. cit., S. 285-6; Karl Diehl; Der Einzelne und die Gemeinschaft, S. 218. 參考。
- 〔註20〕 Karl Diehl; Der Einzelne und die Gemeinschaft, S. 219.
- 〔註21〕 N. Barou; British Trade Unions, 1947, p. 130-133.
- 〔註22〕 Karl Diehl; Über Sozialismus, S. 286.
- 〔註23〕 John Scott; Europe in Revolution, 1945, p. 220.
- 〔註24〕 John Scott; Op. cit., p. 222-3.
- 〔註25〕 John Scott; Op. cit., p. 223.
- 〔註26〕 W. Sombarb; Op. cit., S. 218.
- 〔註27〕 F. Williams; Op. cit., p. 120.
- 〔註28〕 F. Williams; Op. cit., p. 118-9.
- 〔註29〕 Harold Laski; Communism, 1927, p. 243-4.
- 〔註30〕 W. Sombarb; Op. cit., S. 223.